

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別授承認雜誌第三五二號
昭和二十四年十二月廿日印刷 昭和二十五年一月一日發行

第十六卷

第一號

浄土

新年號

おほどかなる春

吉田絃二郎

平和の鐘

吉井 勇

宗教と平和

川田熊太郎

勤行講讀

佐藤良智

1950

1

昭和廿五年元旦

謹賀新春

法然上人鑽仰會

目次

宗教と平和……………川田熊太郎(9)

元旦の念佛……………中野尅子(21)

年頭に望む……………各界密信……………(6)

平和の鐘……………吉井勇(1)

おほどかなる春……………吉田絃二郎(2)

わが行く道は……………動向紹介……………(71)

山望(詩)……………鳥居良禪(5)

今月の常識……………(21)

日常勤行講讀(一)……………佐藤良智(20)



平和の鐘讃歌

讃岐佛生山法然寺の新鐘に寄せて――

吉井 勇

讃岐なる大きき寺の鐘たつれ

わがこゝろまた鳴りか出つらし

この鐘に馬安畫伯の鳩も鑄り

わが歌も鑄るといふはまことか

鐘鳴れはあなや念佛のこゑ聴こえ

法然いまた生きてまします

うつし世も大きき浄土とならむとす

たふときかなやこれの鐘の音

この鐘のひゝかふところ大いなる

やはらきの世の礎となれ

（馬安とは藝術院會員福田平八郎畫伯の雅號）





おほごかなる春

吉田 絃 二 郎

春といふ言葉は日本ではお正月といふ意味に考へられてゐる。おほごかなお正月といふ感じである。したがつて春が來たといへば、老いの身にも一脈の光りのよみかへりを覺える。

俳諧寺一茶のやうに

めでたさも中くらゐなりおらが春

正月も立ちのまんまの屑屋かな

などと辛辣な皮肉を浴びせる人もあらうが、この一茶の句にしてもお正月の目出度さを、前提として出發した句である。

何にしても日本の春はうれしい。日本の春は尊い。

春なれや名もなき山の朝霞

春立ちてまだ九日の野山かな

蓬萊にきかばや伊勢の初便り

このやうな芭蕉の句はいつのお正月にもおのづから、思ひ出される句であつて、日本の春のこゝろを充分ににじみ出させてゐる。

季節の變化、自然の變遷にめぐまれた日本人は季節に對する感受性がきはめて鋭敏である。

春立ちてまだ九日の山といひ、春立つや名もなき山の朝霞といひ、劃然として昨日の冬から切りはなされたおほごかな山を感じ得てゐる。日本人の勘の良さ、神經のデリケートさである。

三椀の雜煮かゆるや長者ぶり

これは蕪村の句であるが、恬憺無慾な俳人の春を迎へる心がうかゞはれる。

芭蕉の目を以つて春の山を見、蕪村の満足感を以つて春の楽しさを味ふのが、すべての日本人の心であらう。

三椀の雑煮に長者ぶりを感じるほどの心があれば、この世の春は不自由がちでも、春として楽しく迎へられる筈である。要は自分の心の持ち方一つである。

一體の出山佛の像、一襲ねの夜のもの、數卷の書、たゞそれだけの物に、いさゝかの酒を添えたのみで深川の芭蕉庵には楽しい春があつた。

このやうな淡々たる心に生きる人たちの生活は他人の喜捨に頼る他はなかつた。その喜捨を乞ふ心はほゞ笑ましいほどに無欲であつた。芭蕉の無心狀を拾つて見よう。

北窓之風よけに致し候むしろ二まいほど被遣可被下候。

かけどうふ風味甚よろしく候間又々頼入候。

夕飯にはあづきめしと承り、たのしみに致候處へ、元山よりそば（蕎麥）と申こし候間あづきは明日／＼早々。

納豆出來致候はゞ御たゞき少々可被下候。紙子羽織出來申候哉。早々頼入候。

扱／＼大雪にて御座候。炭一俵御こし頼入候。以上。

御庭のつゝじ盛候由、明後日可參候。むぎめし可然候間頼入候。

紅のやうなる桑のみ（實）一籠、雪のやうなるしほ一舛ばかり御こし被下候。かたじけなく存候、以上。

御みやげにはかみそり一丁御調可被下候。頼入候。

當秋はきく殊外花ぶりあしく御座候間御庭中菊一枝もらひ申度候以上。

新春目出度存候早々ながら、米二三舛只今御こし頼入候。

机のあしに致候間大き竹四尺五六寸可被下候。

先日のおそば味ひわすれかね申候何とぞ明日頼入候。

今晚でんがく被致候よし、かたく御やき頼入候。出來

次第御遣可被下候。

からかさ無御座候間今日は参り不申候。

今朝も殊に寒く御坐候。紙子羽織今日中頼入候。

先日のかけどうふ殊外味ひよろしく御坐候間又々頼入候。

歳暮いそがしく存候。明後日もちつきに御坐候よし、

出来次第頼入候。

いも頭七つばかり只今御こし頼入候。

まんぢう七つ、あぶら上げ五つ、からし三文、御こし

頼入候。

草庵鼠多く候間、今夜猫御かし可被下候。

十六文とうふ(豆腐) 八文しやうゆ(醤油) 御こし頼入候。

以上これ等の手紙はその多くは弟子の梅石宛に書かれた口狀であるが、これ等の手紙を読めば、ほど芭蕉の庵生活のありさまが想像される。

芭蕉庵には鼠が多かつたこと、からかさがないために人にさそはれても雨の日は外出ができなかつたこと、そばやかけ豆腐やでんがくが好きであつたこと、子供のやうにせつかちであつたこと、歳の暮には早く早くと餅を欲しがつたこと、春早々二三舂の米の無心をしたことなど考へると、およそ、當時の俳人の清貧を楽しんだ氣風がしのばれる。

百舌といふ鳥は木の枝先きに蛙のやうな生物を突きさしてそれを食ふものである。いはゆる百舌のいけにへである。百舌はまた他の小鳥を追ひかける悪戯者である。だから何となしに憎まれ者のやうな氣がする。

ところでこのころ、毎朝、わたくしが顔を洗つてゐると洗面所のすりがらすの窓に来て、こつこつと叩くものがある。初めは雀か、頬白あたりであらうと思つてゐたが、二三日経つとそれが百舌であることがわかつた。

窓のがらすが、すりがらすなため、百舌は顔を洗つて

ゐるわたくしが見えないので、毎朝のやうに窓を叩いてゐる。巢でも作るつもりかと思ふが、さうでもないらしい。

がらす窓を叩く音を、毎朝のやうに聞いてゐる間に、わたくしは百舌を可愛らしい小鳥と思ふやうになつた。

わたくしはほとんど毎日、武蔵野の片隅を歩いてゐるが、このころの寒空の下に農家の庭に、一叢の菊が咲きかをつてゐるのを見出した。菊には丹念に雪霜を避けるために古トタンの屋根がしつらへられてあつた。わたくしは、その後そこを通るたんびに、古トタンをかけてやつた農夫のやさしい心をゆかしく思つては菊をながめる。

昔風にいへば賤の伏屋であらうが、そこに住んでゐる人たちが、せめて一日でも長く庭の菊を寒さから守つてやらうとする心は、日本人の持つ心のよさ、草木に對する慈悲の深さを語つてゐるやうに思はれる。東洋的といふか、佛教的なものゝ觀方のあらはれである。日本人の自然に對して持つデリカシーを感じさせられる。

わたくしの故郷では大晦日の夕暮れには家毎に門の口で、菊の枝を焚いて春を迎へたものである。いつも菊を焚くのはわたくしの役目になつてゐた。

靜かな除夜の鐘に春を迎へる日本に生まれたことをありがたく思ふ。

山 望

鳥居良禪

風は

一夜にして満山の紅葉を散らした
その僧堂のつめたい石段を登ると
林の間に小さな竹の亭があつて
そこから西方に向つて
白雪の富士が眺められた

冬

九折を過ぎると
一望の谷が展けて
芒の穂の間に
荒涼たる寺院の全貌が展開されたが
一瞬
木枯の中に絢爛と消えてしまつた

年頭に

我ら

斯く

念ずる

一、年頭先づ佛教界に望むことは、

二、講和會議に對し佛教者の態度は、

三、原子力と信仰については、

四、本誌に對する批判は、

新年頭ひろく各界知名の士について如上四問にお答え頂いたが、そこに一貫してわれらの體すべきものが感じられる。廿世紀はまさにその半途に到つた。世の多角、多難の道をゆくものに本誌は新しき道標たらんことを念ずる。

圓覺寺管長 朝比奈宗源

一、財政的に崩壊しようとする教團であるがこの逆縁を生かして、正しい信と行との佛教にもどしたいと思う。

二、萬世のために太平の基を開くという願を達成するには報復的でない、無理のない講和をのぞむ。

三、これを機會として戦争を絶滅したい。

日本放送協會顧問 矢部謙次郎

一、釋迦一佛に結案することが第一、今のよりに各宗各派それぞれ所依の本尊經典を以つて各異を立てて居ては只衰滅一途をたどるのみ。

二、日本が一切の武器を投じ、戦争を抛棄したことは佛教三千年來の理想即ち國體民安

兵戈無用を具現することになる。各國とも

未だ日本の侵略主義を疑うものは少くない。佛者は宜しくこの大旗を掲げて國民の先頭に立つべきである。

三、原子力は一大怪物であり、また大魔王である。これを開眼して大慈悲の佛たらしむるは一に宗教者の熱烈なる信仰のみよくする。

淺草寺貫主 大森亮順

一、完全な各宗派の協同一致。

中央にも、地方にも。

二、日本人が古來佛教の感化による平和愛好の國民であることを、世界に顯示するに努める。

三、科學の偉大な進歩に驚嘆すると共に、そ

の力が、人類の福祉を増進することにのみ使用されることを祈る。

駒大教授 英文學者 松浦 一

一、淨土の風光は常に新し。日々是れ好日。

地上淨土建立の他、他念あるべからず。

二、不二門に入れば彼れもなく此れもなし。

肝膽相照して講和の實始めて期すべし。

三、原子力も大自然力なり、佛力なりと思うべし。

四、編者の「若さ」は全誌に溢れて清新の感あり。尙飽くまでも信力と氣魄とに富み、

重厚に、而も「永遠の若さ」の好さを力強く示されたし。

増上寺法主 椎尾辨匡

一、のろしありうるのためらひふりとはしま

いきにかへるのりしめせかし

二、四方ともに平和にすすむはたもちて佛徒と名のるかいこそあらめ

三、大微極ことわるちからくもはらひひかりあふがぬひとぞなくなる

四、せき七重こしてみやこもちかづきぬへボ
ーはいきよみるひとませば

下村海南

一、發佛毀釋と四民平等と物質文明により佛教の教化力は日に日に減退し、基督教新に入りてバイブル和譯さるるも、お經は猶未だ原語棒讀のまま無爲にすぎ、お布施は澤山さし上げるからお經は短くと注文さるるに至る。今や敗戦日本となり大に眼さめてけつ起すべきの時、墓地開放によりさらに打撃をうけ、しかも政府も民衆も關心薄く、教徒長夜の夢猶さめざるが如し、講和會議原子力などの問題より先づ脚下を看られたし。

演劇家 村田嘉久子

一、どの宗旨あの宗旨とお互に反目せず一丸となつて固めてゆかないと、日本の佛教界は危険になるのではないかと感じます。

二、できれば全面的講和、單獨講和でもよろし。中立が希望です。

三、すぐれた人間の知識も悪用すれば悪魔になります。知識の裏づけには信仰が大事です。

四、誰にでも讀めて、讀んだあと心が清らかになるところのあるような雑誌にして頂きたいと思います。

畫家 野生司香雪

一、當今學的青年僧は佛教を研究の對象としているが、僧侶としては行と教化を主力にして欲しい。

二、戦争を完全に放棄したということを憲法の條文に入れて世界に誇つてゐる日本が、米ソの關係から再武裝することなきよう、佛者の努力を要す。

三、原子の發達が若しサタンの掌握する處となり、これが戦争に利用せられる時は科學のため人類の世界は滅亡するであらう。故に佛者は科學の分野を冷靜に批判すべきなり。

四、體驗の信仰を以て指導原理となし、宗教を常に生すようつとめられたし。

文學博士 山本空外

佛教の眞實が漸く全世界に認識せられ來つて、今後の世界の文化と平和を結實せしめるうえに至上の意義を發揮すべき使命を擔うに到つたことに佛教徒は深く自覺するとともに、生活原理としてのその佛道によつて、全人類が現實の矛盾を止揚して淨土といえるごとき社會學實踐に徹するよう傳道を全うしたいものである。

増上寺執事長 中村辨康

率直に申し上げます。老來改めての年頭所感というものはありません。但し勤めする身としては極めて消極的な感想で誠に相すみませんが、本年も大過なくすごしたいものとの希望は年々濃厚になりつつあります。また今まで「いつ死んでもいい」などと云う老人達の言葉を一種のゼスチユアーと位にしか思つて居りませんでした。此頃では「イヤイヤソウではない、嘘のない感想なのだ」と思うようになりました。やつぱり年でせうね。そしてシツクリした念佛の中に靜かに消息したいと云う希望は相當ありますが、中々思うようになれぬのが

世の中だともあきらめて居ります。

美術評論家 北川 桃雄
共立大教授

一、終戦以來佛教徒がこれといった動向を示したように見うけません、日本にとつてより意味の深くなりそうな今年こそは、何か根づよいものを佛教國たる日本人たちに與えていただきたいと思ひます。

四、本山がもつと肩を入れて後援しなければ折角の編集の苦心も十分報いられないでしょう。

出來れば表紙を色刷で明るく口繪は佛像のいい寫眞を毎月入れられたらばと、存じます。

東大助教授 中村 元
文學博士

一、佛教がひとびとのために、ひとびとと共にあることを切望します。

四、清新にして氣品高き信仰の雜誌を編集される御努力に感謝しています。

筑後善導寺貫主 江藤 激英

一、淨土宗の和平合同。各宗大學の合同。中央佛教會館の建設。等々。

二、勝者が敗者を裁くというようなものではなく、この會議を通じて眞の世界の平和と人

類の福祉に貢獻する何らか高い理念の具現を念願する。

三、原子力が徒らに惡魔の使用物と墮せず、眞に人類の福祉に役立たすために信仰が大切である。

四、崇高な氣品は高く評價していいが、もうすこし誰にも親しみ易い様に考慮されたい。

三河大樹寺住職 佐山 學順

一、益々一寺院一事業一僧侶一技能の實行の時が來ました。佛飯を食んで無爲徒食するよりはよろしく還俗すべきである。

二、平和を愛好するは佛教の特色です。佛教の理想の實現を喜ぶ。

三、煩惱即菩提、害する原子力をして利する原子力としたい。

四、今こそ宗教の活動時代、青少年に廣くよまるる様普遍化を希望します。

兒童教育家 内山 憲尙

一、1、う、ち、わ、げ、ん、か、を、し、て、い、る、宗、派、は、本、年、は、け、ん、か、を、や、め、て、一、つ、に、な、つ、て、貰、い、た、い。

2、東京に一つ、京都に一つ、各宗派連合での綜合大學が生れることを希望します。

3、各宗派合同での兒童教化材の立派なものが出されることを念願いたします。

二、講和會議後に佛教徒としてなすべき正しく遠大なる實踐運動の在り方を考えて置かなければならぬと考えます。

三、湯川博士の「目に見えないもの」はよくこの問題を解決してくれています。その一節を借りて見ますと、「科學に於ても最近までは『原子』の不變性が信じられていたのであるが、今日の所謂素粒子なるものは最早や決して恒常なものではない。中には中間子の様に短時間で他の種類の素粒子に轉化してしまうものもある。佛教でいう『諸行無常』という思想も、この點では今日の物理學の見解との間にある共通性を見出すのである」

四、フレッシュな感覺を持つた佛教雜誌として結構です。頁數を少し増して、本屋へも出していただけると、なお結構だと思ひます。

(この項一四頁につづく)

× × ×

× × ×

宗教と平和

文學博士 川田熊太郎

宗教に就いて論ずるとき、淨土教とキリスト教との相似に就いて問はれる事がしばしばある。しかし此の相似は唯だ半面の又は一面の相似たるに止まるものであらう、といふのは、兩者はその根本思想を異にするからである。

淨土教は往生成佛と説く。成佛とは總べての覺者達と等しくして異なる事無き覺者と人間が成る事である。勿論、佛教の覺者とキリスト教の神とは異なるのであるが、しかし、類比的に言へば、キリスト教では人間が神と成る事を承認しないといふのは、厳格な一神教の立場に立つて、汎神論などを拒斥するからである。といふも佛教が汎神論であると言ふのではない。斯く淨土教が既にキリスト教と根本的には異なるのであるとすれば、聖道門の佛教に就いては之を論ずるまでもないであらう。その限に於て我々は昔のシナ以來一部の人々によりて唱道せられたる三教一致といふが、

如き考へ方を取る事はできぬ。然りとすれば、佛教とキリスト教とは其の根本思想に於て唯だ異なるのみであつて、遂に積極的に協力する點を有しないのであらうか。此の協力點の、少くとも、一つは確かに有ると我々には考へられるのである。

イエスは律法を毀る爲にではなくて、之を完くする爲に來たのであると言ふ。また彼に多くの誡命があるが、そのうちの最大なるは、第一に、「汝の主なる神を愛すべし」(愛神)、第二に、「おのれの如く汝の隣を愛すべし」(愛隣)であると言ふ。而してパウロスに依れば、此の愛隣の誡命は、姦淫する勿れ、殺す勿れ、貪る勿れ、などの一切の誡命を包含するのである(ロマ書十三の八―十)。此の新約聖書思想を以て舊約聖書の出埃及記第廿章の十誡を解釋するにその第一から第三までは右の愛神の誡命であり、その第四

から第十までの、父母を敬ふべし、姦淫する勿れ、盜むな
かれ、などの七は右の愛隣の誡命である。故に十誡はイエ
スの言ふ二大誡命に歸着するのである。

佛教に於ては四諦・十二因縁が説かれ、五戒・十善が教
へられ、小乗と大乘とが區別せられ、八宗と言はれ、顯密
と言はれ、教禪律と言はれるなど、一見しては歸趣に苦し
むのであるが、我々は之を(一)不殺生と不偷盜と不邪淫
と不妄語と不飲酒との五戒と、(二)般若を以て縁起を觀る
(以深般若觀無自性)との二つに纏める事ができる。換言
すれば戒と定慧との二である。我々は之をパーリ語相應部
(雜阿含)十二の『因縁相應』の第四十一經に根據しても言
ふことができる。勿論、二千數百年の歴史を有する佛教思
想の纏め方には、此の他になほ種々のものが有つたし有り
得るのであるが、當面の目的には右のにて充分である。

さて、右の通りに簡潔に纏められた佛教とキリスト教と
を比較しよう。その時、(一)五戒と愛隣の誡命とは、その
表現形式に關して少しく異なるが、その内容に關しては大同
である。而して五戒は諸種の形態の集團生活を營む人間の
守り行ふべき諸徳のうちの重なるものを擧げたのである。
十誡の第四以下も同様であつて、決して諸徳を網羅しよう

とするものではない。愛隣の誡命は其れらの諸徳を一つへ
收めたのである。(二)それ故に根本的差異が見出されるの
は、般若を以て縁起を觀ると、汝の主なる神を愛すべしと
の各々の根本思想に於てである。此の二つは其の表現形式
の異なるが如くに内容もまた異つてゐる。我々は此の差異を
如何ともする事ができぬ。

我々は斯く如何ともなし難き根本的差異を有する諸々の
根本思想を知性の徳と呼ぶ事とする。此の知性の徳は人々
が其れに依りて以て生きる所の根本の眞理であり、根本眞
實である。般若を以て縁起を觀るのは佛教の根本眞實であ
り、インド的な知性の徳である。汝の主なる神はキリスト
教の根本の眞理であり、イスラエルの知性の徳である。
而して若し知性の徳を此の意味のものとすれば、我々は右
の二つの他になほ數種の知性の徳を世界思想史の内から取
出す事ができるであらう。次ぎ次ぎに斯く異なる根本思想に
基づきながらも、右の五戒と愛隣の誡命との如くに、その
大體に於ては、人間の集團生活の理法なるが故に、人間の
住む何處に於ても通用するものを、我々は人倫の徳と呼ぶ
事とする。此の人倫の徳の實質或は内容に關しては、佛教
的に考へるとも又はキリスト教的に考へるとも、大同こそ

あれ、大差は有り得ないのである。而して若し人倫の徳を此の意味のものとすれば、我々は右の二つの他になほ數種の形態の人倫の徳を世界思想史の内から取出す事ができるのであらう。

さて若し以上の如くであるとすれば、佛教とキリスト教とは、知性の徳の見地からは、根本的に異なるものである。しかし兩者は、人倫の徳の見地からは、人間の諸種の集團生活に關して大同の方向に、共に俱に配慮し考量し世話し活動し得るのである事も亦明白である。此の事は唯だ佛教とキリスト教とのみに就いて言はれ得るのではない。他にもなほ存在する所の數種の根本思想に就いてもまた言はれ得るのである。といふのは、其れ等も亦、知性の徳としては異るとも、人倫の徳の見地からは、他者と共同し協力して人類の幸福を考量し、之が爲に活動し得るものであるからである。

言ふまでも無く、我々は今日に至るまでの世界歴史の内にて宗教と宗教とが、世界歴史的量の根本思想と根本思想とが争闘した事實を知つてゐるし、また現に見てゐるのである。然りとして佛教とキリスト教との二者は、既に明かなるが如く、その根本思想即ち知性の徳を異にするのでは

あるが、人倫の徳の見地からは共同し協力する事のできるものである。故に各々の根本思想を互に理解し尊重する時には、二者は人間の集團生活の爲に、人類の幸福の爲に協力して考量し活動し得る領域を共にするのである。故に之によりて此の二つの宗教は平和への道を共に歩む事ができるであらう。しかし此の歩みは右の意味にての各々の知性の徳の理解と尊重と、而して之に基づきて初めて可能なる人倫の徳の領域に於ての他者との協力とに、其の全身全心を傾注する人々の努力に懸るのである。(終)

(筆者、文理大教授倫理學主任)

二月號豫告

人間の見直し

——法語解説——

佐藤賢順

妙好人をたづねて——信仰實話——

阿川貫達

勤行解説——その二——

中村辨康

隨想

吉田絃二郎

冬の一日をゆく

北川桃雄

ブーゲンビル島の回心

藤田寛雅

元旦念佛 中野 尅 子

誰でも念佛申すことは嫌いです。そんな事はツマラヌと思つています。それは全々お念佛を申した事の無い人や、お念佛を知らぬ人なら兎も角も、毎日、お念佛申している人や十年も二十年も、お念佛を申して来た人でさえ、本當は、お念佛を申すことは嫌いで、こんな事はやつても、其實、何も得るところが無いナと思つています。だから好きになれぬし馬鹿にしています。

大體お念佛を勧める役の坊さんや、先輩達でさえ自分が乗り氣でなく、好きでないから勧めるのにも力が入らぬのです。そんな事では自分以上好きになるような人は出来ぬ譯です。

それでは、ナゼ好きにならぬか。好きになれぬかと云うと味がわからぬからです。御飯でさえ、生れてから以來何十年と、日に二度も三度もたべて来たのに、少しも嫌いにはならぬ。口では、こんな物がまづくて喰えるかななどとゴゴトを云つて居つても、喰べることは嫌いでない、それは食物の味を知つてゐるからです、又喰べる事の楽しみを知つてゐるからです。そして若しも一食を抜いたり、喰べ物が足らぬとスグ空腹を感じて、たべる事にガツガツする。それと同じように、精神的にも空腹を感じ、コレを満たす方法まである事を知つたら、もう少し一生懸命に其の精神的糧を探し、それを貪り喰うだろうと思ひます。それが本當に自分の精神が空虚になつてゐることすら氣が附かず、人間内容のブーアな事をも知らず、ウカウカしているものだから、毎日幽鬱で生活が面白くならぬのです。

此頃は、食糧の方は大分豊富になつて、空腹を感じるものがなくなつたが、反對に精神的方面はだんだん貧しくなり、野暮や出鱈目が多くなつて、餓鬼生活や地獄生活を平氣でやつています。そして宗教や道德というものは過去の遺物のように思つて、佛や神は假定のモノ、假想のモノときめ、天國や極樂は説教で云う話、風習や義理人情で縛られることすら嫌つて、自由奔放にやり廻つて素晴しく愉快な生活がして見たいと思ふが、さて其自由が思ふようにも出来ず、不平や不満でイライラしています。

◇ 今月の常識 ◇

元日(一日) 説明するまでもない。國民の祝日に關する法律では「年の始めを祝う」と定義し、文部省は「年頭挨拶の交換會、適當な場所に集つてお互の幸福を祝う」と説明しているが、私たちは家の内外で、古いしきたり新しいやり方、いづれにせよ、この一年の發足を明るくしかも強いものにしたい。

成人の日(十五日) 男の元服、女の髪上げ、これが昔の若い人々に成年の自覺を與えた。戦争までは徴兵検査がすむと大人になつた氣持で酒やタバコを覺えたが、悪い意味での、おとなの自覺は禁物。「おとなになつたことを自覺し、みずから生き抜こうとする青年を祝ひはげます」というこの日、年令のおとなではなく、内面的おとなとなつて、社會に生きてゆくことをのぞみたい。

御忌(廿五日) 建曆二年(一二二二)正月の廿五日、淨土宗開祖、法然上人はその新佛教

それは、尊き人間性、天地の大道と云うべき根本的眞理に基いて、生活が出發して居らぬから、やればやる程、無理になつて、自分を苦しめ、他を苦しめ、社會が悪くなつて、悪くなつた環境によつて又自分が苦しめられる。所謂「道理」に背いた事は「無理」であつて、脱線しているまままで進めば進む程六つかしくなる。

ソレに氣が附いて「コレではいかぬ——」無茶や無理をやつてもいかぬ。矢張り、道理に従つて眞實の道をやらねば駄目だと氣が附いて「廻れ右！」をやつた時、それが「念佛」です。自分の心の中から「本心」が目覺めて、此の本心、此の佛心が、太陽の如く顔を上げると、心の中、生活の中——は一度に晴れ渡り、朝日に輝く大黎明となり、新天地に生きる喜びと力が充ち満ちて來ます。

コレを見ると、成る程、今迄はワザと自暴をやつていた、あれでは次から次へと旨く行かぬ譯だ、自分の勝手ばかり振舞い、人への親切や都合は考えた事なし、自分が横暴で獨專して置き乍ら、まだ不平や不足で當り散している。其の自分の不満が自分を不幸にし不愉快にしていたのです。

念佛は死んでから先きの世の爲めにスルのでもなく、今の自分が「正しく生きる」爲めです。佛の爲めや先祖の爲めにしてやるものでなく「吾が爲め——」にスルものです。そして「吾れ」が先づ生き「天地が」生きる姿です。

既に既に、山も河も、花も鳥も、箸も茶碗も、猫の糞までが、天地の大生命によつて形造られ、生かされていたのです。此の「力の活動」、「眞理 活動」、「生命、意志の活動」が無かつたら、一切は存在せず、一切は生長せぬのです。此の大活動、生々發展の事實を綜合して、「神」と呼び「佛」と名づけるのでした。

自分の存在の奥には、此の「如來」が常に動き給う。此の如來が常に私を念佛させ、念佛している時、此の如來相に還つた私の姿です、だから今迄の黒いタドンのような自分に較べると千倍の輝きがあり、萬倍の力が溢れる。お釋迦さまでさえ如來に住して法を説き給う時は「光顔巍巍」として、見る者をして仰がしめ、天地感應して六種に震動したと云われています。決して誇張した修辭では無いのです。

本當に「お念佛」の出ている人間でなくては、人間らしい人間ではない、人生らしい人生を暮しているのではありませぬ。

運動の生涯を終られた。歿御において孝養のために精舎建立のいとなみをなすこと勿れ、若し報恩の志があるなれば唯一向に念佛せよ——と遺誡された。弟子たちは師の忌日を迎える毎に大谷の地に集つて一七日の別時念佛をつづけて來たが、中世に至つて後柏原天皇は大永四年「自今孟春の月に遇はば宜しく京畿の門葉を集合せしめて一七晝夜、法然上人御忌を修し」て吉水の流れを汲むものの、その本源に報謝すべき詔を下された。御忌とは元來、天皇、皇后等の御忌日に行なわれた法會を意味したが、この詔によつて、法然上人の御忌日法要をも御忌と公稱するに至り、その法式も次第に定まり、それによれば御命日の廿五日を最後とする七日間、即ち正月十九日から廿五日迄、嚴修されるのが恒例となつた。

念佛の門に入るものの忘れがたい日であり信仰の道を行くものの以て心の道標とする日である。この日を自らの生活に生かし現代に生かすことがのぞまれる。

新春に われら 斯く望む

—各界寄信その二—

安藤正純

一、佛教界の組織體制に革命的の變革を施し、全一佛教的の體制を整える傾向を、勇敢に助長すべし。そうでない限り、佛教界はただ世間のおつきあいに終始して、筋金を通らない。

佛教者は戰敗國民に許さるる唯一の精神的平和的理想を高く掲げて、せめては世界の思想的大勢を指導する位の、氣魄だけでも、持つてもらいたい。それには現在のような尻の穴の小さいことでは駄目で全一佛教的の體制が必要である。

その體制の第一歩として、佛教綜合大學

の創設を熱心に主張する。今後世界文明を融合する廿世紀新文明建設の、一方の基礎となる東洋文化の蘊奥は、この佛教綜合大學に依て研究することが出来るようにしたい。大河で一とたび尻を洗わないと、この決断はいつまでも出来ない。

私は年來、全一佛教の主張者であり、(既に幾度も發表している)又先年、佛教綜合大學について微力を傾倒し、今一步で實現というところで駄目になつた。遺憾に思っている。

私は現在、なるべく引つ込んで口を開かないが、今度こそは是非勇敢に進んでもらいたい。

講和會議に對する佛教者の態度も、やはり同じことで、佛教者は戰敗國民の唯一の自由たる、人類の幸福と進歩とを高揚し、戰爭放棄に對する日本人の信念を、宗教的信仰にまでもつてゆく努力が必要である。

實業の世界 野依秀市
世界佛教

一、佛教の一大特長は微に入り細に入つて釋迦如來の哲理思想というよりは、寧ろ私は超圓滿なる超高等常識といった方がいい位

と思うが、兎に角釋尊の思想、即ち悟りを演繹したところにある。而してそこに宗派が出来上つたのであるが、然るにその弊の甚だしきものを見るに至つたのは、餘りに道が分れすぎたのであるから、之を出来る限り歸納せしめて、佛教を他力淨土門を一つにし、自力聖道門を二つ位にちぢめて了うことは必要、それを是非二十五年にやり遂げたいものである。小異をすてて須らく大同すべきものである。その先駆けとしてまず佛教綜合大學を建設すること。それには眞に佛教の根本思想を體驗すること、即ち無我的になつて、各大學關係者が死んだつもりになつて、綜合大學出現のために一切を抛つという氣持になれば出来るのである。綜合大學の出現には誰も異存はあるまい。昔からいつている「身をすててこそ浮ぶ瀬はあれ」の教えを實行しようではありませんか。

二、佛者も人間である。而して此場合の佛者というのは日本人を指しているのであるから、我々はやはり日本人という立場をはなれては考えられない。どこまでも宗教の信仰は絶對に自由であるが、同時に誰が見ても當然迷信邪教とされるものを取締る規則

が作られるようにしたい。邪教の標準は、宗教で身體の病を治すということを第一としたい。

三、原子力がいかようであろうと、我々の阿彌陀佛に對する信仰は絶対に變りなし。如何に原子力がすべてのものを破壊する力があつても、萬物の生命力の根源そのもので根絶することは出来ないと思つてゐるから我々の業は永遠不滅だと信じてゐる。従つて惡業からお救い下さる阿彌陀佛のお慈悲を信ぜずにはおれない。

四、淨土誌に關する感想はありません。即ち讀んで居らないからです。然し強いというなら淨土眞宗と淨土宗を合併するよう大いに頑張つてもらいたい。

慈光學園長 吉原自覺

一、和敬清寂(殊に宗門にのぞむ)

二、無條件降伏をした日本としては講和を選ぶ權利はないが、佛教徒としての願望は全面的講和でありたい。遠大な世界平和の進展を考慮して全面的講和の現實的解決を可能ならしむる様努力してほしい。

三、完全進化の過程として發明せられた原子

力が、人類殺戮に使用されないで、すべてを生かす力として利用せられたい。これこそ如來への進行であり信仰である。

四、同人不退轉の御協力に感謝してありますがまだ力に餘裕がある様です。願くば往年清澤滿之先生を中心として一世を照した求神誌のように飛躍して濁世を開化し指導して欲しい。

駒大教授文學博士 増永靈鳳

一、自己に對して、——學究の立場より日本佛教界のために大いに努力したいと思ひます。

教界に對して、——日本佛教界はこの試練期を忍従するとともに、他日の活躍に萬全を期すべきです。

二、單獨講和でなく、極東委員會の全部が承認することを望みます。戦争放棄、永世中立のために。

四、原子力は戦争のためでなく工業化し、交通機關化し、醫療化して人類の幸福を増進すべく活用すること。戦争用のものは實際管理して使用させぬこと。宗教家の提言必要。

四、よく編集されています。表紙に時代のセンスを出されれば更に結構と存じます。

燒津町光心寺住職 北山良祐
荒磯海青年會長

一、イ(聖德)太子佛教への還元

ロ、現在の寺院經濟の基盤たる儀式に對する徹底的反省、忠實なる奉行

ハ、伽藍佛教より街頭佛教への轉換進出

二、イ、太子佛教への還元に對す佛者の模範的實踐

ロ、「條約は一枚の紙に過ぎぬ」の前例が後者の轍とならざるよう、その基礎的要件として信仰的態度による會議の開催。

三、原子力科學者並に原子力管理委員會等の原子力に係る人々が、純正且つ強固なる信仰的態度を絶対不可缺の性格として一層の研究されることを望む。

四、信仰情操の培養を目的とされる「淨土」であると信ずる點より、御執筆講師先生方と讀者とが直結出來得る機構を御考究下され純正信仰への道を開いていただきたい(信仰相談とその在り方)

青森正覺寺住職 楠美知行

一、イ、積極的に大衆と接觸の機を數多くつくること

ロ、佛教思想の鼓吹

二、平和愛好心の昂揚

三、正しき信仰は原子力以上に強し

四、一般大衆に愛讀される様今少しやわらかに。

宗教問題研究所長 濱田本悠

一、世界平和の前提としてこの米ソ調停の第一線に立つこと。

二、全面講和の前提として部分に對處すること。

三、世界の原子力研究機關を通じて人類相愛の信仰を鼓吹すること。

四、淨土信仰の文學的表現を多とすること。

淨土宗東京布教團長 戸松學瑛

一、イ、各宗の大同團結強化

ロ、教義内容の平易化と實際化

ハ、佛教徒たるの矜持をもつて……

二、先づ國民の良識養成と反省心とを要望します。

三、イ、迷信の打破

ロ、宗教と科學との關係解明

四、待たるる「淨土」となれ。

大正大學教授 阿川貫達

一、蝸牛角上の諍をせず大同一致して佛道の宣布躬行を希念します。

二、怨親平等の見地より世界平和に資するものでありたい。即ち全面的平和を念願してやみません。

三、金剛不壞の信心は原子力を以つてしても破られない。是れある故却つて益々信仰を深くする。

四、多方面に興味ゆたかではありますが、「淨土」の名にふさわしきものに願います。

善光寺大本願傳道部長 丸山幽水

一、新興教團簇生の折柄、既成教團の傳道樣式その他の面に於て、大衆にアツピールする要素の必要を痛感する。

二、平和とは戦争と戦争の道程的地帶をさすのでなく、絶對的な單獨的存在としての牢固たる眞の平和を希求したい。

三、相對性原理の「博士は、科學を通じて宗教の靈性的實在あることを認識された。

私は信仰の面に於いても原子力の驚異あることを信ずる。

四、讀み易き活字の組方、吉田氏の毎月執筆等は編集部の勞を多としたい。

中村 康隆

一、傳道會社の創設をのぞむ

二、恒久平和の實現を期すること

三、信仰なき原子力の亂用は人類に罪惡と破壊とをもたらす。佛陀の教説のみ新しい時代を救う光である。

四、信仰の體驗が欲しい。

傳統か 革新か わが行く道は

——寺院の在り方——

都市寺院は戦災の深傷になほ悩み、地方寺院は農地開放によつて舊來的維持の足を失ひともに布教活動の新しき轉換は、寺院の内外に要請されている。しかも宗教を求める聲はひろく且つ深い。そこに誤れる道が宗教の名の下に人々を誘つてさえゆく。

純正なる信仰のために、寺院は、佛教者はいかに在るべきか、何をなすべきか。誰しもがひとしく憂ひともに想ひを碎くところである。ここに我々は空論美辭ではなく、騒烈たる現實、脚下に先づ鉄を下し教團の開發に辛苦する人々の切實の聲にきき、その姿の中から明日への第一步を學びとりたい。

本誌はかかる意圖により各方面に亘る佛教運動の先人努力の迹を、或は現に發足の辛苦に歩む人々の寄稿報告を迎えてその動向を相次いで紹介したい。かかる道標こそ明日への道を具體的に示してゆくからである。

静岡縣焼津町の青年層の殆どを念佛信仰に結集された北山良祐氏（光心寺）の一步を先づここに御紹介する。（編集部）

青年會の一步

北山良祐

「熟慮は結構ではあるが、斷行しなければ木石に劣る」とは、敗戦して復員した日の私の心情でした。以來あの疾風怒濤の世相の中で私は一點を、即ち「私の住する寺」の時代的存在意義を、ちつと凝視し考えつづけていました。苦しい反省の日々を迎えては送りました。現實と理想との隔絶は大きくなつてゆくので、私は無氣力と苦悶の暗黒の中に陥つてゆくのだとさへひしひしと感じました。

無氣力になりゆく自分を鞭うつたもの、聲

なき聲無形の力言つてみれば「牛に曳かれて善光寺詣り」のその牛の力です。有難き縁の力、言葉は變ですが、私にこの「牛」が與えられたと言つてよいでせう。「先づ始めよう」そして始めることによつて鞭撻され、監視されつつ忠實に歩んでゆくことが出来るだろう。自己を顧みれば、他を導くなどということは全く出来ない。「牛」に曳かれ導かれてゆく私なのだ。私一人だけでも歩いてゆこう、と決意しました。こうして他律的ではあるが幾つかの實踐の一として成年式を行いました。

成年式だけでそれは終る豫定だったが、その時參加した幾人かの青年の熱意にひきずられて、それが毎月の青年會へと動いてゆきました。成年式を受けてくれた青年は男女合せて二十八名だったのです。

成年式を機縁として、青年會へ、まことにこう書けば順縁そのものです。しかしやがて一人減り二人減り、月の進むに従つて青年會の缺席が四人、五人とふえてゆくのです。何か自分の無能力をまざまざと見せつけられている氣持でした。初めの氣持も忘れて私は焦りはじめました。時には一人しか來ない。私は相手の青年と、何か氣まづい思ひで、共々

に前途を悲観して語りました。

再建のために、私はかけづり廻りました。幸いに私もまだ青年でした。最後の起ち上りの努力、出發當初の自分を想い起すことが出来ました。眞實一路の旅を鈴をふりつつゆく順禮の笠にかかれた「同行二人」のころ、青年會の名の下に執られていた私は、「みほとけ」と共に、青年會の名稱はともかくとして同行二人の歩みをたゆみなくつづけて行こうと決心することが出来たのです。一年は忽ちにして過ぎてゆきました。やがて第二回の成年式の日が近づいてきました。擧式さえおぼつかない想いでした。

ところが、今迄缺席つづきの一期生とでもいいますか、第一回の成年式を受けた數名の青年が、或いは學校を卒え、或いは歸郷し、又は夏季の多忙な家業から暫らく解放され、などで進んで第二回の成年式を援助してくれ、受講生たちの面倒をみてくれることに恵まれました。去る十一月九日の成年式はこうして、當初の豫期に反して、三十七名の参加をみて盛大に擧行することが出来たのです。そして今度は第一期の青年たちが、自ら進んで會の運営に責任をもつて當ることになり、いまこうした幹事十名の努力と、會員の心か

らの結集とによつて、名前も荒磯海（ありそみ）會として、會規もつくられ健やかな進みを始めようとしています。

會規について一、二記しておきます。會員は光心寺の檀徒と否とを問はず、要は會規の精神に共感して佛教的實踐に勵み、進んで社會に奉仕せんとする人たちから成つています。ただ光心寺に於ける成年式を受けたものを正會員―同信とし、未だ受けぬものを準同行としています。年令は十九歳から廿二歳迄の男女と一應限定していますが、會員は結婚によつて名譽會員となります。尚ほこうした會の維持の問題ですが、この會は原則として會費を徴收しません。ただ會員が名譽會員となるとき、自己の財力に應じて獻金することになつて居り、些か他と異彩をもつものではないかと考えます。

各地において佛教運動の一環としての若い人たちの結集があり、それぞれに成長の迹を顧みるときいろいろと苦辛があつたことと思ひますが、私たち更に廣く深く、他の志を同じくするものとも提携してたゆまぬ成長を上げてゆくことを念じて居ります。

□ありそみ會員短信

日本アルプス連峯の汚れなき雪は清らかな

水流となり、裾ひろく全てのものをうるはしてゆく。敗戦日本の、殊に青年の我々に缺け、また忘れられているのは、この清流にも譬うべき心であらう。信仰こそこの清流を興えてくれるとは、誰もが内心のどこかで感じてはいても、今までの佛教は、私たちが親しみ身近く感じるには何か遠く高いものがあつた。そのとき光心寺の成年式が機となつて、信仰への若い心の一步を印することの出来たのは喜びにたえない。一步一步と自分をたかめてゆく決心でいる。（川村和男）

今までの宗教への古い偏見をすてて、自己の修養、ひいては青年會を通してより高い信仰の生活を築き、お互の毎日が希望であり、勇氣でありたいと願う私たちに今夜もまた淋しい集りだつた。青年會が發足して半年もたぬのに、既に大半は來なくなつてしまつた。成年式當日の廿數名の集つた氣持がこうも簡単に消えてゆくものだろうか。再建の努力も、ともすれば中絶の想いに挫けそうだ。

ところが第二回の成年式も終り希望にみちた若き心友を大勢迎えることが出来た、苦惱の一年空白の一年を省みて、深い反省の中から新しい勇氣が湧いて来る。（片山茂樹）

お寺といえは老と死に直結されている様に

感じられ、若い人は殊にお寺をそのように見
てきた。この點キリスト教は老若を問はず教
會に通つてゐる。私たちがこの一年、お寺に
親しんだが、別に老死が近づいたとも感じな
い。こんな點でお寺は荒磯海會のこのお寺の
ように明るく開放的で民主的であつていいと
思う。青年の向上しようとする熱意は尊いし
お寺が、佛教がそれに答えてくれる。會は一
段の努力が必要です。(齋藤滿江)

浮遊性の人一倍つよい私は、深く落ちつい
た雰圍氣を欲していたので、成年式、それら
の會合も、よき修養の門と感謝しています。

お寺は抹香臭い所、といった考え方を一掃し
て、自然な美しく明るい會が伸びてゆくのを
喜んでいきます(福田)

會の趣旨には同意していても、回を重ねる
度に出席が減り、殊に女性は皆無の有様でし
た。しかし僅かな人たちのため努力がこ
こまで成長して來ました。お寺、という言葉
で頭から何か古い觀念をあてはめて近づこう
としない様な偏りを捨てて、親しみの中に修
養して行きたいと思ひます。(堀田ツヤ)

お墓詣りの歸り、法事であろうか、本堂の
前に履物が四散していた。整理しよう、とし
たが、後から人の來るのを感じて止めて出て

しまつた。「言葉だけ美しくて實行の伴はない
のは色あつて香のない華の様なものだ」と思
ひ出すと再び引返して本堂へ行つた。以前の
私なら整理はしないだろう。いや、そんなこ
とを感じもしないに違ひない。些細なことだ
が、良惡の判斷、實行力を私につけてくれた
のも荒磯海會である。(岸岡)

未知の世界への門に一步をふみ入れる機會
が與えられ、忘れ勝ちな宗教への眼を開いて
頂いたことが第一に嬉しい。この一年間がど
んなに大切であつたか、と回顧する日がきつ
と來ることを信じています。(貝原一安)

檀家の青年の成年式を行う、との通知を受
けたとき私には二つの考、相反するものが閃
いた。誰かよい指導者を得て文化的集會を持
ちたいと思つていたことからの喜び、之に反
して青年の間にある寺というものに對する考
え方―これは寺のこの行事に大きな障害にな
り、青年は近づきたがらないだろうという悲
觀、この二つだつた。幸いに住職の努力、理
解のある青年の協力、それが成年式を盛にし
た。生むまでの苦勞はきびしいが希望のある
ところに必ず發展があると、顧みて私は痛切
に想つてゐる。(片山勝彦)

十一月九日は私の第二誕生日となつた。成

年式を受けた當時、私は興味本位に小説を讀
んでいました。青年會に出席してその環境の
中で私の讀書傾向が變つてきました。古典的
なもの、宗教的なものに。會が私に新しい人
生の行き方を教えてくれたのです。(鈴木)

青年會とはこんなつまらない會なのでせう
か。集るごとに段々少なくなつてと、私も家
が忙しくなるのを幸いに遠ざかつてしまいま
した。少しも自分を反省しないまま、一年過
ぎました。新しい會員の明るさ、一期會員の
熱心さが、私を再び會に誘ひ入れました。(北
山精子)

ありそみ會の活動の一面として講演會、信
仰座談會などが相次いで催されているが、本
年は左の本誌關係の諸氏が赴かれる豫定。

一月 佐藤賢順氏 二月 村田喜久子氏
三月 中村康隆氏 四月 増谷文雄氏
六月 藤田寛雅氏 九月 竹中信常氏

* *

* *

勤	行
解	説

淨きを念じて

—— 第一講 ——

佐 藤 良 智

香 偈

願我身淨如香爐、願我心如智慧火
念念焚燒戒定香、供養十方三世佛

淨土の信者が、あしたに、夕べに、み佛のみすがたのみ前に、うるわしき華を献じ、聖なるみあかしをとぼし、清らかな香を薫じ、たなごころを合して、泌々と聖句を讀誦したてまつり、自らの信を淨め、深め、自らと他人との、最上の幸福を、念じ、願う方式を「こんぎよう式」とよんでいる。

行を勤むとの意味である。

その最初の聖句が「香偈」とよばれる。

香は古來、東洋の特産物である。古代西洋からみると東洋は香料

の國、寶の國と思はれる位であつた。

よき香りは、地上のもろもろの、けがれを、淨めてしまふ。そして、ほんとうの宗教は、最上の「きよめ」をもとめる。そこで、先づ香を薫じて、一切のものを清淨ならしめる意味から、この偈をはじめに誦するのである。偈とは、ガーターのことで、詩の形式である

一、こうろろの如く

願はくは、わが身、淨きこと香爐の如く——(第一句)

われわれの身體ほど、ふしぎなものはない。これを肉體とみるときは本能の巢である。人間は、この肉體の故に悩み、悲しんできた。肉を罪惡のかたまりとさげすみ、この肉體をはなれることを理想とする宗教すらある。宗教といへば、いつたいに、肉をさげすむかたむきがある。それは肉體にあらわれる、つみ、とが、を憎しむあまり、肉體そのものを輕んずる結果となつたのであらう。ここに宗教の危險がひそんでゐる。

肉體をさげしむやうな、原因が、肉體にはつきまとうと共に、肉體こそ、たたえらるべきものであることを、地上のあらゆることが示してゐる。人間のこの肉體を尊ぶべきことを教えてこそ、眞の宗教なのである。肉體こそ、讚美され、尊ばるべきものなのである。

法界（いのちの世界）に、この人間の肉體の存することによつて、どの様に、眞理が花さき、美が發見され、聖なるものが實つて、宇宙が美わしく、莊嚴されたことであらう。

しかし、それは、肉體が本能のままに、あれ狂うことによつてではない。戦争の如きも、人間の肉體の奥ふかく、巢くつてゐる本能のはげしい、あらわれの一つにすぎない。この肉體が淨められ、「いのちの世界」からさづかつたものであることが眞にわかり、この肉體という、尊きうつわに聖なる香の薫ぜられたときにのみ、肉體は讚美されるのである。尊い香を薫じやうとしても、これを薫すべきうつわがなければならぬ。このうつわの淨からんこと香爐の如かれかし。願くはわが身、および一切の人のからだよ、淨くあれ、香爐の淨きが如く淨くあれ、と念じた句である。

二、ちゑの火

願はくは我が心、智慧の火の如く、——（第二句）

火を拜む、拜火教という宗教がある。古來、火は、聖なるものとして、あがめられる。火は、暗黒に光をもたらし、一切の、けがれを、やき盡す。宗教の儀式には必ず、光り、を用いる。

しかし、宗教に用いる火が、ただ、光明の故に尊いというのではほんとうの、宗教の意味を現わさない。佛教にあつては、この火は、智慧をあらわす。み佛の前に燈明と華を供える。この華はみ佛の、愛即ち慈悲を表現する。あみだ佛は、智慧と慈悲との御徳をそなえ給うがゆゑに。

およそ、地上に咲きいでた、高き低き宗教はかぎりない。そのなかにあつて、佛教ほど、ちゑを重んずるものはすくない。いな、唯、一つのものと言つてもよい程である。おほかたの宗教が、肉體を輕んずると共に、ちゑを重くみない。淨土の教えの「愚に還える」の愚は、ちゑのかぎりに、ほのぼのと、みえそめる、をろか、であることには今はふれまい。

智慧の力があつてこそ肉體が生きるのではないか。單なる肉體は「もの」にすぎない。この肉體に光りをとほすものは、智慧の火をほかにしてはない。み佛は、もろびとの、こころの扉を開き、智慧の光を點じたもう。ああ、わがこころ、火となれかし。火の海となれかし。願くば、わがこころ、たえせぬ智慧の火ともえよ。もえよ。焰々ともえよ。

三、戒と定とをやかん

念念に戒定の香を梵燒し(第三句)

香爐に火はもえてゐる。なにを焼くべきか、絶えせず、戒と定との香をたかん、という。

佛法では、戒と定と慧との三を、三學とよんで、佛陀の廣く、深いみ教えを、この三で區分してゐるのである。この三つを詳にすることは、佛法の全體を説き示すことにもなる。戒はわれわれの、身心の規範ともいふべきもので、戒律とも、普通によんでゐる。律と戒と別々に考えることも、同一なものとも考えることもできる。戒と定と並べる場合、戒はわれわれの行動、生活にかかわるもので、定は、ここに、かかわるものである。われわれの、生活、行動全體を正しく持することが戒である。そのなかには、色々の徳目もあげられやう。たとえば、人は、生きとし生けるものを、そこなわず尊び、はぐくむべしとする、不殺生の徳目などは、その第一に挙げられるものである。また、人は、財物に對して正しい取扱ひをしなければならぬ。經濟生活の最も合理的なものをもたねばならないと説く。(不偷盜) また、人倫のみちにおいて、よこしまなことがあつてはならないという。徳目をあげる繁はやめよう。地上に於ける最も高い、倫理を説くのである。いな、どの様な、小さき道德の一つも宇宙の正法に根ささないものはない。その正法にかなう倫理生活といふことが戒をまもることなのである。戒の香を薫ずることなのである。この香が智慧の火にもゆるわけがらは、實にここに

あるのである。

定とは散ることに對することばであつて、こころの、みだれないことである。われわれのこころは、ちちにみだれるのを、そのさかとしてゐる。このさがからぬけ出でることは、なかなか難い。こころをみださず、集中することは、なにごとをなすにも必要なことである。佛教の起つた印度にあつては、心を統一するのに、色々の工夫をし、その方法にも中々すんだものがあつた。しかし、この心の集中といふことは、ものごとを成就する爲に、没頭する爲に必要なことであつて、統一集中そのものに深い意味があるわけではないはずである。定とは、鋭く、よく、ものを見、考え、判斷し、決斷し得る、安定し、調和のとれた、澄んだこころを持つことが必要なことである。この様なこころこそ、智慧の火にもゆるものであり、また、智慧の火によつて一層、そのこころが、澄み、みがかれるのである。正しい生活と、正しいこころ、との香を、念念に、そうです、絶えず、智慧の火もゆる香爐に薫じて――。

四、み佛に供養せん

十方三世の佛に供養したてまつらん(第四句)

大宇宙にみ佛は満ち満ち給う。大法界はかぎりのない廣さと、かぎりのない永遠の時の流れとを、覆いつくしてゐる。あみだ佛はかぎりのないみ光りと、かぎりのないみいのちにて、大法界にまします。あみだ佛は一佛でましますと共に、四方上下、過去、現在、未來、無數のみすがたのみ佛にまします。いまこの、大みひかり、

大い、のちのみ佛に、智慧の火もゆる香爐に、戒と定とを薫じて、供養したてまつる、というのが、この第四句である。供養のことばは、意味深かい。供養ということばは、しばしば用いられる。よきことばであるからであろう。いま、この偈の場合、われわれの、正しい生活と、正しいところとをみ佛に供え、み佛を養うことであろうか。それとも、正しい生活と精神とをみ佛によつて養われることであろうか。その兩方であるのではなからうか。もと、

三 寶 禮

一心敬禮十方法界常住佛

一心敬禮十方法界常住法

一心敬禮十方法界常住僧

香偈の文を讀誦し終ると、五體投地即ち額と兩腕と再膝とを大地につけて、佛と、法と、僧との三寶を禮拜する。これを三寶禮とよんでいる。

三つのたからを重ずることは、佛教を重ずることである。この三をほかにして佛教はない。この三寶に二通りある。佛陀の御すかたを木像に或は、繪畫にしてあらわしたものを佛とよび、經典として作られたものを法とよび、また、出家したものを僧とよぶ。これは眞實の三寶とはいいがたい。

佛とは、佛陀の略稱であつて、われわれに親しいことばで言えば、

われらも、大法界の、かぎりなきみ光と、かぎりなきみ、のちの外にあるのではない。ただ、このろの盲いたる、生活のにこれ因縁によつて、さまよえる者なのである。

いまここに、戒と定との香となり智慧の火に自らを焼くときに、十方三世のみ佛は、自らを養い給うと共に、われらが身心を養い給う。供養するものは、供養される。

香偈の文は、まことは美わしく、廣大であり、尊き極みである。

「覺めたるもの」の意味である。み佛は、くらやみを破り、いつも、いつも生き通しに生き給い、いつでも、どこにでも、嚴然としてましまし、また、お慈悲の涙をたたえて、十方法界に常住したもうのである。

法とは、眞理であつて、釋尊によつて示された、まことなるものである。この眞理は、しかしながら、釋尊のこの世に出で給うも、出で給はざるも、かわることなく、眞理であるものである。釋尊はこの眞理によつて、覺者となられ、この眞實を身をもつて體現し給うたのである。

僧とは、僧伽の略稱であつて、その本來の意味は、『集り』である。社會である。主として釋尊のみ教をふみ行ふともがらの、集團を僧伽という。眞理のみちを、ふみ行ふ者の集りである。

三寶とは、このやうなものである。

一心に十方法界の常住のみ佛に敬禮したてまつる——

いのちあふるる眞理の世界を法界とよぶ。この法界は常住である。しかし、靜かにとどまつてゐるのではない。いきいきと、かぎりなき、いのちあふるるみくにである。このみくにに、み佛は常にまします。生き通しに、生き、かがやき通しに、かがやいて、まします。み命に、み恵みに、あふれ、かがやき給ふ、永久のみ佛に敬禮したてまつる。

一心に十方法界の常住の法に敬禮したてまつる——

まことの世界は、法の世界。眞理を外にして、われわれの安住する世界があるうか、いつわりの世界は人類の敵である。いつわりの世界にこそ罪が集く。人は永遠に、いつわりとたたかわなければならぬ。科學は眞理の世界にのみその光りをはなつ、眞理に、即ち法に従はない科學は眞實の科學ではない。

原子學は、極微の世界の探求から起つた。佛教の色法のなかの出來ごとである。色法とは、物質を意味する。その色法中に極微のことがかなり詳に説かれてゐる。湯川博士の御著書の中にも佛教の極微のことが書かれてゐるという。佛教は理化の科學と相反するものではない。物理、化學の發達は、佛教の色法の研究の發達である。色法は法界のすべてではない。色法が法界の一分であることは事實

であり、ますますその研究はすすめるべきであるが、その研究も佛教では不足であつた。ただ、それがすべてでないこと、及び、その色法は法界の一分であつて、法界全體のかがやきの一分であることが、忘れられる時、科學の危機がある。

いつわり、貪欲煩惱のしもべとなつた時、科學は亡びる。いつもどこにも、輝く眞實の法に、われら人類は一心に敬禮したてまつる

一心に十方法界の常住の佛に敬禮したてまつる——

僧伽は集りであるが、單なる社會ではない。眞理に導かれる平和社會である。佛教に於いては早くこの僧について考えたのであるが出家僧にのみ執えられて、法界における平和社會についての考えが強まらなかつた。佛教の歴史においても、インドの阿育王、日本の聖德太子のやうな、すぐれた佛教徒は、このことを切實な問題として考えもし、また、實踐にうつされた。理想社會の建設こそ、佛教徒の最高目的の一つである。和合僧と言つて、その理念においては尊ばれた。この敬禮の文も、この和合僧の尊ばるべきことを示してゐる。

本來、法界は和合社會である。大調和の世界である。法界そのものが、常住僧である。眞の平和はこの常住和合僧を尊ぶことによつて初めて達せられる。人類は、世界は、争いつつ、平和をねがう。まことの平和は人間が眞理にねざす社會をうちたてて、初めて實現される。そのやうな社會は、十方にあまねき大調和世界即ち法界に歸一することによつてできあがる。一心に、この大調和世界に敬禮したてまつる。(筆者 大正大學教授)

芝園だより

明けましてお目出たう

◇時計の針がコチンと動き、除夜の鐘がゴンとなるとお正月、編集同人一同も心機一新してまた皆様の御支援を充分頂けるよう努力いたします。

◇廿世紀もその中途にいよいよ達し、昨年からニュース線上に大きく浮んだ講和問題も、今年に入つて更に歩一歩と、具體化してゆくことでせう。新年號は、われらが念願の「平和」を中心とした内容で、出發しました。平和、平和と、之はかけ聲であつては何にもならない。佛教者が、日本の、世界の平和のためにどう働きかけてゆくことか。問題はここ。

◇各界知名の士に對して本誌が、設問し御回答を願つたところ、御覽のとおり、誠に「新年頭われら斯く念ずる」の一路を先づ描くことが出來ました。世上俗誌が宣傳のために一流人を並べるのと違つ

て、この各界眞情の聲の中に、期せずして一讀自ら一貫する流れのあることを注視されたい。廣く信頼され堅實な内容に立つ本誌にして初めて得られる佛教界への白書。

◇そこで次の問題は、われら如何に生くべきか、であろう、地方に活動される人々の動向を相次いで紹介し、後來の人々への道標を掲げてゆくとともに、本誌を通じて互にひろく手を結び意見の交換事業擴大も願わしいところ。

◇信仰への門は八萬四千の法門の言葉とおりにあるが、先づ日々の勤行から。この一歩のために、日常勤行の講讀を連載してゆきます。何卒味讀實行をお願いします。それと共に、信仰誌としての本領に立つて次號から、法然上人法語私釋を、順次連載します。敢て私釋と申すのは、單に傳統的解義のみならず、眞に現實の生活苦惱の中から、法語に信仰の源泉を汲みとりたい意向からです。常に新

しき生命をもつものこそ、また眞に古典たり得るものです。

◇そこに又信仰の實踐に生きた人々の迹もまたふかく偲ばれ、聖僧、妙好人の傳記實話もつねに本誌にのせてゆきたい。眞實、心の平和は、信仰に生きる他にはあり得ない。今年こそ、平和のためのわれらが最良の年たらしめたい、というのが今年のわれわれの編集方針でもあり、ここに誌友會員の方々の一層の聲援をのぞみます。

◇新年になつてしまつたから、ホツとするものの、本誌の出版にとつては是非、最良の年にしたい。師走は師匠まで走り廻る程だという言葉だというが、全く年の瀬を越す苦勞はお互容易ではない、どこからまともに経済援助を受けるでもなく、唯會員諸氏のみを基盤としての經營出版、それだけ強味もあるが、それだけに時折息がつまる。冬來りなば春遠からじ。なにと暢氣に待つてはいられない。今年こそいよいよ宗教復興の時代

に入る。とは各界の人々の期せずして一致するところ。新しき時代の目覺めのために、本誌同人も苦闘をつづける覺悟です。(藤田)

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「淨土」 一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿四年十二月二十日印刷
昭和廿四年 一月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田錦町三ノ十

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番
會費番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓(送料共)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年十二月廿日印刷 昭和二十五年一月一日發行

第十六卷 第一號

定價金二十圓(送料三圓)